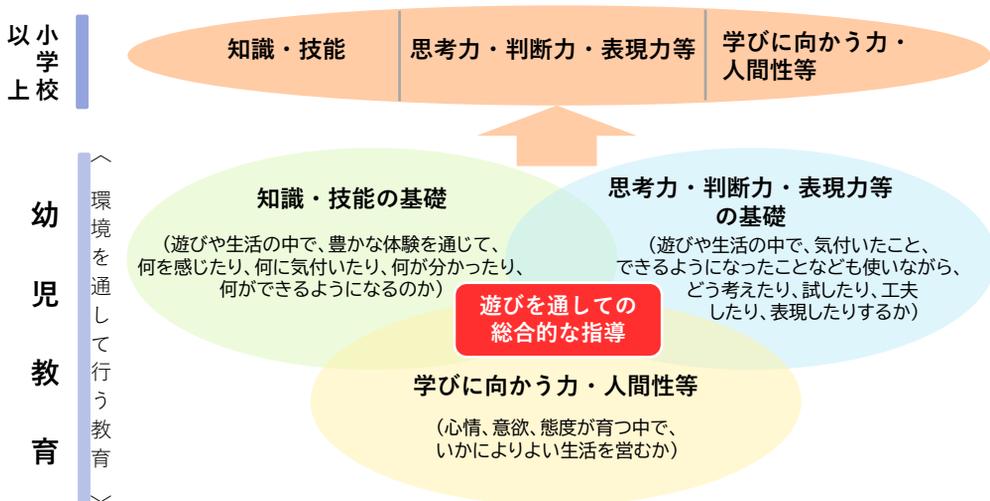


幼児期から育みたい思考力

現代は少子化、気候変動、生成AI技術の進歩などに見られるように、先行き不透明な予測困難な状況と言われます。そのような時代を背景に、自ら課題を見つけ、学び、考え、判断して行動し、よりよい社会や人生を切り拓いていく子どもを育てるにはどうしたらいいのでしょうか。

課題を解決するために必要な資質・能力として、学習指導要領では「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等（以下、思考力）」「学びに向かう力・人間性等」という3つの柱が示されています。そして、「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」では、それらの資質・能力の基礎を、遊びを通じた総合的な指導のなかで一体的に育むことが求められています（図1）。

図1 幼児教育において育みたい資質・能力の整理



※文部科学省（2016）「幼児教育部会における審議の取りまとめ」を加工して作成

本冊子では、予測困難な時代に、自ら学び課題を解決していく資質・能力として思考力に着目し、幼児期からどのように見とり育むことができるかを考えていきます。

思考力に着目する背景には、日本における幼児教育・保育の特徴として、全体として子どもの主体性を尊重し応答することへの意識が高く、それに比べると思考や探究に関わる援助はあまり重点が置かれていないことがあります¹。よりよい社会や人生を切り拓いていくための資質・能力は一体的に育まれるものですので、様々な視点から子どもの姿をとらえることが大切です。保育者が子どもの主体性の育みとあわせて「思考力」への意識を高くもつことで、より一層、子どもの成長につながるのではないかと私たちは考えました。

また、小学校の学習活動を通して育成が目指される思考力は、入学後にゼロから育成するものではありません。思考力の“芽”の部分は幼児期から育っています。いわゆる“お勉強”として、座ってワークに取り組むような活動ではなくても、幼児が遊びのなかで「こうしたい」「ああしたらどうかな」と考えている姿のなかに、たくさんの思考力の芽生えが見られることでしょう。その力を多くの人と共有でき、援助を考えられたら、子どもは自分の力で考えることがもっと楽しくなるのではないかと考えています。

¹ 国立教育政策研究所(2023)「幼児教育におけるプロセスの質に関する研究(幼児期からの育ち・学びとプロセスの質に関する研究 報告書 第2巻)」

思考力の芽生えをとらえる枠組みとして「思考スキル」を用いる

幼小接続期に子どもが発揮する思考力を、具体的にはどのようにとらえることができるでしょうか。ここでは、幼児期の遊びのなかでの育ちと小学校の学習活動とのつながりを意識しやすいように、19の思考スキルの枠組み（表1）を用いています。この枠組みは、学習指導要領において育成が目指されている思考力を、「比較する」「分類する」など具体的なスキルに表したものです。私たちは、この枠組みを用いることで、幼児期における思考力の芽生えがよりとらえやすくなるのではないかと考えました。

表1 19の思考スキルの定義

多面的にみる	多様な視点や観点にたって対象を見る
変化をとらえる	視点を定めて前後の違いをとらえる
順序立てる	視点に基づいて対象を並び替える
比較する	対象の相違点、共通点を見つける
分類する	属性に従って複数のものをまとまりに分ける
変換する	表現の形式(文・図・絵など)を変える
関係づける	学習事項同士のつながりを示す
関連づける	学習事項と実体験・経験のつながりを示す
理由づける	意見や判断の理由を示す
見通す	自らの行為の影響を想定し、適切なものを選択する
抽象化する	事例からきまりや包括的な概念をつくる
焦点化する	重点を定め、注目する対象を決める
評価する	視点や観点をもち根拠に基づいて対象への意見をもつ
構造化する	順序や筋道をもとに部分同士を関係づける
推論する	根拠にもとづいて先や結果を予想する
具体化する	学習事項に対応した具体例を示す
応用する	既習事項を用いて課題・問題を解決する
広げてみる	物事についての意味やイメージ等を広げる
要約する	必要な情報に絞って情報を単純・簡単にする

私は「比較する」
思考スキルを
表しています



出典：泰山裕（2014）「思考力育成を目指した授業設計のための思考スキルの体系化と評価」

この枠組みを使うことで、どのようなよいことがあるのでしょうか。まず、**子どもの姿を手がかりに、思考力をとらえられる**ということです。例えば、図2（P.6）の子どもたちは、砂場でどろだんご作りをしています。思考スキルの枠組みをもって子どもたちの会話を聞いてみましょう。すると、「この砂では固まらないのに、ぬれている砂では固まる」というように、砂の違いを〔比較して〕いることや、「固まるのは、雨が降って砂が水にぬれているからかな」というように、これまでの経験から〔理由づけ〕たり〔関係づけ〕たりして考えていることが見えてきます。

次に、**子どもの思考力を育む環境構成や援助の工夫に生かせる**ことです。保育者が子どもの具体的な姿から思考力をとらえることによって、もっと子どもの経験が広がり、考えが深められるような環境を工夫することができます。

最後に、**保護者や小学校との連携を深められる**ことです。子どもに育てている思考力を、小学校の学習活動につながる力として保護者や小学校の先生にも伝えることができます。「楽しそうに、夢中で遊んでいる」という見とりから一歩すすめて「何に対して、どのように考えて、夢中になっているのか」に着目しやすくなり、子どもの興味や関心、思考のプロセスを具体的にとらえられるようになっていくのです。

図2 だろだんご作り

効果1

子どもの姿を手がかりに、思考力をとらえられる

砂遊びをしている子どもたちが、だろだんごを作っていますが、うまく固まらない様子です。

A児 「この砂はサラサラでうまく固まらないな。こちの砂だと固まるのに」

●-----→ 比較する

B児 「雨が降って砂が水にぬれているからかな」

●-----→ 理由づける
関係づける



効果2

子どもの思考力を育む環境構成や援助の工夫に生かせる

保育者

「だろだんごを作るために、土砂の様子を『比べ』て、水の量と固まりやすさを『理由づけ』たり『関係づけ』たりしているわ。なぜかたさに違いができるのかをもっと考えられるように、今度は田んぼの土でも作らせてみよう」

効果3

保護者や小学校との連携を深められる

保育者

(保護者や小学校の先生に思考スキルの枠組みを示しながら)

「砂遊びのなかで発揮される力は、小学校の学習活動でも育成が目指されている大切な力なんですよ」

「思考スキル」の枠組みを使った保育者の声



漠然としていた、「幼児期の思考力って何だろう」ということが具体的に見えるようになった



子どもに付いてきた力を見とることで、どのような関わりができるか気づけるようになった



遊びを通して学びの芽が育っていることを、保護者や小学校の先生に伝えられることで、保育への自信につながった

また、保育者から「非認知能力」の育ちが見えるようになってきた、という声も聞かれました。

- 「やさしさ」や「おもいやり」があるということは、相手の視点にたつ〔多面的にみる〕ことや、相手にとっての分かりやすさを〔見通す〕という思考スキルがあることだと気づいた。そこから、思考スキルのようないわゆる“認知能力”と一体的に育まれる“非認知能力”のつながりが見えるようになってきた。

このように、子どもの力を見とって他の保育者と共有し、保育の改善につなげることや、遊びを通して育っている力を可視化して、保護者にも伝えていくという活用が期待できます。